



第46号
 発行
 釧路湖陵同窓会
 くまざさ編集委員会
 発行日
 平成17年3月1日
 印刷所
 藤田印刷(株)

釧中・湖陵高同窓会総会 平成16年8月14日土曜午後4時から



チアリーダーが華を
 釧中・釧路湖陵同窓会の2004年度総会と懇親会が、さる8月14日、釧路キャッスルホテルで開かれ、約400人の同窓生が参加して、高校時代に思いをはせていました。例年よりも若干遅い、午後4時からのスタートでした。

総会では、校歌斉唱、黙祷に引き続き、栗林延次会長(湖陵17期)が、「後輩たちの活躍を各分野で耳にしています。さらに多くの同窓生のみなさんに参加していただき、大きな同窓会にしたい」とあいさつしました。次ぎに多くのご来賓を代表して、釧路湖陵高校の野村秀明校長と釧路市の伊東良孝市長からお祝いの言葉をいただきました。議事は、長内宏議長(湖陵2期)の進行により、事

業と決算報告などを満場一致で承認しました。

懇親会は、長い期間準備をしてきた当番期を代表して佐々木淳さん(湖陵22期)があいさつしたあと、チアリーダー部が登場、会場は一気に華やかな雰囲気になりました。例年、器楽部や合唱部がそれぞれ披露していましたが、今回は3年生が模擬試験と重なり、チアリーダー部がアトラクションを担いました。夏の高校野球釧根地区大会では、残念ながら1回戦敗退し、練習の成果を発揮する場がなかったのですが、その分、先輩たちを前に思い切り若さをおぶっていました。

スクリーンでは、新旧の校舎や同窓会館などが映し出され、参加した同窓生は、高校時代の話しに盛り上がっていました。最後に、当番期で裏方を支えてきた高橋一人さん(湖陵32期)が感謝の言葉を述べ、また、元応援団長の中納淳裕さん(湖陵42期)が、応援歌を熱唱、参加者全員は起立して、湖陵高校へのエールを送り、よりいっそうの発展の期待していました。

来年は、23、33、43期の同窓生が当番期となります。(星匠)

釧中11期「昭3会」が寄贈
 アテネ五輪で谷亮子、野村忠宏が柔道の金メダルによる幕開けした8月14日3階鳳凰の間にて開かれた。

校歌斉唱に四百人の同窓生らが在校生時代にそれぞれが戻り歌う。「日本一の校歌」と甲子園での紹介を先輩が誇りがたがる。さすが、東京、札幌湖陵会の一歩だけでなく三番まで斉唱だ。

会券千枚以上を売上し、同窓会費と総会費の倍以上の収入によって、百周年への特別積立金に蓄積していく歩みに踏み出したのである。

加えて昭和3年卒業「昭3会」の釧中11期生、三国久四さん(遺族の肇さん)岩間美智雄さんから同期会の積立金62918円を同窓会別途積立金に寄贈して戴いた。

栗林会長らによる鏡開きで酒も配られ、先輩後輩の交流が始まり、各テーブルは老若男女をとわずに親しみと懇談に包まれたのであった。(奥田達也)



「誠愛勇から」湖陵5期生 6頁
 教職員湖陵会50周年記念・支部だより 7頁
 事務局だより・編集後記 8頁

目次

野村秀明校長と生徒たち 2頁
 活躍する卒業生 3頁
 釧中32期・最後の全国大会旅行 4.5頁

「日出づる国の北陸」から

北海道釧路湖陵高等学校長

野村 秀明

私の教職生活の最後を伝統校湖陵で終えることができる幸せをしみじみ味わっている。

本校で、感性豊かな生徒達に、生徒のためには時間を惜しまない同僚に、学校を温かく見守ってくれる保護者に、そして、熱き思いで母校を支えてくれる同窓の方々に出会えた。

着任した平成14年の9月21日に、本校創立九十周年・定時制八十周年記念式典があり、正に、同窓の方々の全面的なご支援・ご協力により、成功裏に終えることができた。盲目の弁護士竹下義樹氏の感動的な講演、会場一杯に響き渡った生徒の校歌が、今でも鮮やかに思い出される。

私は、着任早々の始業式で生徒に、「校長の使命は、生徒諸君の命を守ること、諸君に最善の学習環境を提供することである。」と述べ、数日後の教職員の歓迎会の挨拶で、

「生徒にとって最善の学習環境が教師である以上、「最善の授業」を提供することが教師の使命であ

る」旨の話をした。

先生方はそのことをしっかりと受け止め、様々な取組を発案し実践してくれた。

まず、同15年度当初に、「授業の改善」の観点から、全科目の年間指導計画の「シラバス」化とその全教室掲示を実施した。教室掲示はあまり例がない。同年度、文科省の「学力向上フロンティア」と、道教委の「北海道サイエンスフロンティア」の研究指定を機に幅広い取組が一層進められた。その一環として、全国で初めての一校単独での「大学統一説明会」が実施された。大学の説明を真剣に聞き、志望し合格していった生徒の姿を見て実施して良かったと思う。この年度の3年生の進学実績は、本校の歴史の中で第2位を誇る。

二つの研究指定は同16年度も継続されたが、4月29日を「湖陵の日」として、本校保護者だけでなく、中学生とその保護者をも対象に「互見授業」が実施された。アンケートでも好評であった。11、

月19日の道教委指定の研究成果発表では、生徒が質の高い発表を行い、さすが湖陵生徒という評価を得た。同17年2月に行われる「環境教育フォーラム」でも発表を依頼されている。

さらに、今年度、授業改善の一環として、「指導と評価」のあり方を工夫するため、「生徒による全教科・科目の評価」が実施された。

私は、伝統校で、しかも進学校で実施した本校の先生方に心から敬意を表し、感謝を申しあげたい。生徒の評価を真摯に受け止め、それを授業の改善につなげていくならば、これ以上の学校改善はない。来年度は、学力向上フロンティア研究の最終年度として、三カ年の「シラバス」作成と評価の改善・充実を目指している。

本校は、「日出づる国の北陸」から、様々な取組を通して、さらに一層、「関十一州に反響」させつつあると確信している。



生徒たちと一緒に 野村校長

活躍する卒業生

笑顔で仕事を

山 下 マ ミ
湖陵55期 平成16年卒業



私が釧路市役所に入庁してから三ヶ月がたちました。今は職場の雰囲気にも慣れ、良い先輩方に囲まれて、充実した毎日を過ごしています。

新採用研修を終え、実際に戸籍住民課証明係の仕事が始めて、最初に覚えなければならなかったのは、窓口の仕事でした。窓口では住民票や戸籍簿本の申請を受け付けたり、転入や転出の手続きをしたりします。4月は特に忙しい時期だったこともあり、初めのうちは、次々にたくさんのお客様と応対し、気づいたら、もう一日が終わっているという日が続きました。慌ただしい時間が続きましたが、先輩方が一つ一つ丁寧に仕事を教えてくださり、私はそれをメモにとりながら覚えていきました。

私が窓口に座っていて、まず感じたことは、毎日本当にたくさんの方と出会える仕事だということです。たくさんのお客様とお話しできることは、私に

ら、自分なりに心掛けていることが一つあります。それは、いつも笑顔でいることです。市民の方にも、職場の仲間にも、常に笑顔で

接することが、今の私の目標です。これからずっと、笑顔を忘れないうように、市民の皆様のため、頑張っていきたいと思っています。

夢をたくさん持つて

大槻理化学(株)勤務 月 見 和 史
湖陵41期(平成元年卒業)



昭和45年生まれ。33歳というところでは、楽しく、学ぶことも多いのです。それは、直接市民の方と接する職場だということですから、そこに責任も感じます。ミスをする、職場の仲間だけではない、お客様に迷惑をかけてしまいます。それに私の対応の仕方一つで、市民の方の市役所に対するイメージが決まるのです。市外から転入して来られた方に対しては、釧路市全体の印象をも、左右しかねません。新人であっても、お客様から見れば職員の一人なのですから、窓口で座れば、不安な顔もしていられます。

昭和45年生まれ。33歳というところでは、楽しく、学ぶことも多いのです。それは、直接市民の方と接する職場だということですから、そこに責任も感じます。ミスをする、職場の仲間だけではない、お客様に迷惑をかけてしまいます。それに私の対応の仕方一つで、市民の方の市役所に対するイメージが決まるのです。市外から転入して来られた方に対しては、釧路市全体の印象をも、左右しかねません。新人であっても、お客様から見れば職員の一人なのですから、窓口で座れば、不安な顔もしていられます。

市民の方との間にトラブルが起きることもあります。でも、そんな時にはいつも、先輩が励ましてくださいました。今もまだまだ覚えなければいけないことも多いのですが、優しい先輩方に助けられながら、毎日楽しく仕事をさせてもらっています。本当に就職して良かったなと思います。

仕事の内容は営業で試薬を中心としたサイエンスに関わる製品や病院の検査試薬を販売しています。ルートセールスといって特定のお客様を訪問し、必要な商品をそろえたり一緒に問題解決に取り組んだり内容は様々で、外で仕事をしている私に対し内勤でバックアップしてくれる部下に支えられて仕事が成り立っています。

内勤の女子社員という表現には不平等さを感じさせますが、これが未だに普通なのが一般社会。私の働いている会社でも営業職の女子は一人でこれが例外です。学校の現場では女子の活発な活動が男子のそれを大きく上回って

いることはよく聞きます。湖陵高校で女子が生徒会長になるなんて私が高校生の時にはありえない話でした。一般社会では子供の世界が変化することに気がついていないのです。不況がずっと続く中、今の状況が普通だと考え直すときはすでに過ぎていると思います。この不況を不運と思うかチャンスと思うかは、その人次第とは思いませんか。安定した中に変化を起こすことは大変難しいですが、変化が続いている中で新しい可能性が見えてくるチャンスはたくさんあります。高校時代に選択した進路が人生の選択に大きく影響することは否定しませんが、全てではありません。現にサラリーマンとして生活している私も頭の隅ではラーメンの屋台を引っ張ったり、畑を耕したりする別の人生のイメージを他にもたくさん持っています。一つ一つが夢なのでどの選択をしても決して妥協の人生にはなりません。選択して捨てていったものを



(増子 正樹 作画)

もう一度見つめなおし拾い上げてみてください。きつとそこにチャンスはあります。仕事だけではなく大好きなテューバを今でも吹いていて自分のバンドまで作りました。バンド活動をするのが目的ではなく高校生どき思っていた「吹奏楽で生きていく」を諦めていないだけなんです。分別のある大人には、ばかげた話かもしれませんが、これほどたくさんある夢のうちのひとつ。このばかげた夢が4年目になり確実に前進し、更なる可能性がどんどん大きくなっています。夢は人生を豊かにしてくれれます。どうですか、恥ずかしいくらい思い出をもう一度現実まで引っ張り出してみませんか。

愛冠岬の景観や国泰寺へ

「修学旅行」も結実



「愛の鐘」をつく釧中32期生

故郷を訪ねて懐しさに興奮

まちに待った10月5日午前11時。釧路駅前阿寒バスターミナル前に二年前でも会った学友の顔々。はしゃぐ。何をしゃべったかも分からない。

バス車内の右側へは遠方からの人々に、と。左側に市内の友だち。係担当の気のきいた者が前部に。発車から挨拶の「おう！」「おう！」で若やいだ？ 元気な声。



平成16年10月5日・釧路シーサイドホテル

雪裡橋、別保と通り上尾幌小学校同期の小黒章司、笠巻重司らを思い出し海基倅男、愛澤喜昭と語る。もう尋ねてこれない故郷であろう。

昼食の厚岸ホテル五味に稲葉善一が歓迎スタイルで待かねている。ビールの乾杯もどかしくカキ飯に喰いつく。久方振りの初宴会。でも旅は始まったばかり。

愛冠岬は初めての人も多く故郷の景観に飽かず眺め入る。国泰寺も太田村屯田兵屋や記念館も説明に聞き入るばかり。(後日に稲葉善一は同窓会館に3万、同期会に2万円を寄付した)

あと久寿里橋、幣舞橋を渡って一夜目のシーサイドホテルへ。ここまで私はたいして呑んでいないはず。車内のワンカップの酒。我が家の近く。我が風呂同然の湯に仲間とつかった。湯舟でおしゃべりし、中村幸雄が出て一人になって湯あたり。裸のまま床に倒れ

「もう俺の人生も終りか？」
誰も居ない。誰もこない。
ようやく我が部屋に浴衣だけでベッドへ倒れ込んだ。
「記念撮影だゾ！」
そんな声を聞き乍ら、じっとしていた。

ようやくにして這うように宴会場へたどりついた。正面に今年表彰された同期生らが紹介されてい

る。撮影のライト、祝杯の音頭。賑やかな末席にたどり着いた。妻が到着。寺島壽薬剤師が丸薬をくれる。呑んだら一ペンに癒った。酒がすすみ、おしゃべりもすすむ。仲間との話から、この写真、あの文章と自宅へ取りに戻り又、馳けつける。

宴会場から各部屋に分かれ、騒ぎが分散し、ようやく我が家へ寝りに帰った。

二日目。朝食のサンマ焼きは旬。みんなと一緒でおかわり。

小雨模様となったが本行寺、定光寺の寺町に米町公園、東栄、日進、城山小。そして母校湖陵高と同窓会館などを見学し、千代ノ浦海岸を巡る。時間調整をしながら徳田廣名ガイドがあらゆる知識を披露して、懐しの竹老園で昼食だ。あとは故郷を離れた友に思いの橋北、鳥取を見せて湿原展望台から釧路湿原の景観を眺めさせた。

「遊久の里ホテル鶴雅」阿寒湖畔の名湯に浸り、新しい造り、大広間に山海の珍味の料理が並び、飲みや唄え踊れやの大騒ぎ。竜宮城に招かれた浦島太郎の気持そのまま。宴を移しても麻雀、囲碁に酒。最後の夜はいつ果てるとも尽きず。

朝食のバイキングにもみな元氣。

結実の旅行参加者

—敬称略—

「道外」小谷慶治、愛澤喜昭、小川博、海基倅生、片岡良蔵、近藤暉、佐藤伸一、嶋田昭、相馬是行、中村隆俊(好江)、藤田睦夫、八木宏「道内」青柳敏彦、秋葉収、板垣正男、河崎弘、組村真平、斉藤一、田中敬(和子)、辨野友一、滝昌之、寺島壽、塚本保、萩野重利(百々子)豊島正敏(恵美子)、本間国秀(市内)稲垣勝美、奥田達也(予志子)清水闊、白石一男、高木謙吾、飛世春夫、富澤正美、中村幸雄、西田直哉、長谷川芳一、早川静、宮下之良、宮脇彬、宮脇功、徳田廣

秋の阿寒湖は晴れ渡り、紅葉はいまを盛りに彩りをそえている。「クシチュウ32期さまも……」と観光遊覧船のガイドさん。英語は流ちょう、と感心して聞いていた。釧路のクシ。釧中もセンチュウとはもう読んでもらえない時代に入ったのであった。

あとは帰途。雄別炭鉱鉄道記念館を開けてもらい見学し、雄別の友を、また発電所勤務の父をもつ小川博の住居を探し、小中時代の昔を偲んだのである。

最後の宴はパークゴルフ場食堂でジンギスカンとおにぎり。

酒杯を乾して別れを惜むもしきり。釧路空港で友を送り、釧路駅前でお別れした三日間の「結実の集い」であった。

同期全国大会 故郷と母校 「クシ中32期さま御来



釧中32期「結実の集い」16年10月5日「愛冠岬」にて

なぜにかくも「修学旅行」にこだわるか？
いまの人たちにわかってもらうことはむづかしい。

釧中に入学して敗戦までの3年とその後卒業するまでも貧しい時代で「修学旅行」など言葉として出せない雰囲気であったから。入学から卒業まで「勤労奉仕」という学業よりも働くことしかなかった。働くだけを考え、それがなければ食事はなかった。

卒業前にも軍関係へ早々と入隊した者もいる。早いか遅いか軍

校長室

見学の第一は同窓会館である。何度と寄付金募集で協力を仰いだ。

なつかしがつて皆が見入ったのは旧校舎の模型だった。中学5年高校も加えると6年間に学した。色々の各人の思い出が籠っている。

その案内から新校舎の校長室へ野村秀明校長が招き入れてくれた。明るく広い。

まず歴代の校長の写真に見入る。

岡部金夫、大根田資雄、安達三夫校長と7〜9代に見憶えあり。

とくに大根田校長が長い。

人となるのである。それが敗戦で追われるように就職し、仕事に励み定年退職、こうした学生生活と一緒に過ごした学友と仲良く旅行する楽しみは、憧れた「修学旅行」だけなのであった。

しかし年月は無情にも老の坂をこえて74歳を迎え、いつまでも続けるわけにはいなくなかった。

それで九回目の今回が「結実」という名の最後となったわけ。

集まった46名が賑やかに親しみ会ったのもゆえはない。これが全国大会の最後なのだから。

「予科練への応募は愛国心のバロメーターである」と力説したのだ。

「寄付金は愛校心のバロメーターである」と変ほうした。

純真な生徒には百八十度転換の動揺にますます不信感を抱いた。

校長室へ呼び出された私に、「父親の職業は？」

「大工です」と私。

「銀行員です」と狩野健一郎。

内庭からの光をバックに嘲笑した大根田校長の顔を私は忘れな

い。

その校長の「民主主義について」と私の小説と一緒に『北東文化』に載ったから尚更に嫌われた。

新憲法公布記念の市内式典で、中学代表として級長が祝辞をのべ



国泰寺を訪れる釧中32期生

るべきを渡辺弘副級長に代え、校旗々手を私はさせられたつけ。

8年前の「富士周遊の旅」で近くの大根田校長の墓参が提案。

「いやだ」と大声で否決したつけ。

今にして思えば、全く大人気ない。さんきのきわみである。

その校長室に、12月20日観葉植物「幸福の木」(ドラセナ・フラグランス・マッサンゲアナ)が5年ぶりに花を付けた、と。

「初めて見た。普段はあまり気に留めていなかったが、ラッキーを運んでくれそう」野村校長談。

「ハワイアン・ティー」(幸福を呼ぶ木)とハワイで言い伝えられる。

きつと私たちが訪れ、育てられていた植物も目ざめたにちがいない、と。

(奥田 達也)



湖陵高校校長室を見学 (思い出の校長ら)



校歌斉唱で生徒に戻る

誠愛勇から

湖陵5期生

憧れの湖陵生に

怒涛の時代であった。

敗戦の余塵がまだくすぶりつづける中で湖陵高等学校がスタートした。昭和24年の学制改革である。昭和9年生まれ（10年の早生まれを含む）は、

太平洋戦争の始まった昭和

16年国民学校に入

学し、戦後は新制中学、新制高校ともに進級した。いわば混り気のない一期生である。唯一戦前から「小学校」体験のなかった学年。生粋の時代の子だ。

昭和25年、憧れの釧路湖陵生となった。もともと釧路市の学区は、いわゆる大学区制で、釧路工業高

昭和28年卒業の湖陵5期生、戦後まもなく入学、日本の高度経済成長を支えてきました。学生時代の思い出や同期会の近況などについて、横澤一夫さんに執筆をお願いしました。

や、新設の女子高釧路星園高を除けば、地域によって湖陵と江南高校に配分された。わたし達は湖陵高五期生となった。釧路中学らしいの、熊ざさの校章は新しく制定されたが、校歌はなぜかそのまま受け継がれた。男女共学という言葉が新鮮に響いた。「男女七歳にして席を同じうせず」で育った先輩たちはどきまぎしていたが、中学の3年間でトレーニングを積んだ新制っ子たちに戸惑いはなかった。

被災都市・釧路市の復興は目ざ

だった。地方都市の高校生たちは、戦後の代表的なヒット作となった映画「青い山脈」に描かれた群像に似ていたかもしれない。映画といえば、当時の若者にとっては最大の知的分野で、学校の部活動でも「映画研究部」（略して映研といた）が幅をきかせ、社会人グループと合同の合評会を開いたりした。文化活動では「写真部」も人気があったが、2眼レフの写真機はまだ高価で、I君が持っていたローライ・オートマットが話題になったりした。

怒涛の時代、そして

元気にたくましく

ましかった。戦さが終わったころの釧路市は七万人にも達していなかったが、やがて太平洋炭鉱の活況、漁業・水産の飛躍などで加速度的に人口も増えマチの様態は変貌して、あつという間に10万人都市になった。

しかし学校生活はのどかなもの

十勝沖地震と火災

5期生の高校生活で忘れられない出来事といえば昭和27年3月4日の十勝沖地震と、翌28年2月22日の旧校舎全焼。地震の発生時は2階の教室で授業中だった。恐怖は地震が鎮ったあとにわいた。校



昨年5月18日「湖陵互輝 熱海・箱根周遊の会」初島クラブ前で

舎の火災は卒業を目前にして大学受験のため上京していた学友もいたようだ。慌てて駆けつけたが、燃えさかる火の手になすすべもなかった。この年の卒業式は当時の釧路市公会堂（のちの公民館）で行われた。

湖陵5期会は伊藤文雄会長、力石敏彦幹事長のもとに例年9月に同期会を続けているが、近年は札幌・東京勢が元気がいい。とりわけ東京は「湖陵互輝会」と独自に命名、首都圏から関西までを傘下に毎年、旅とグルメを楽しんでいる。

一昨年は関西在住の平野準一君、和嶋千鶴子さん、浜田舜子さん、山本奈保子さんから4人が幹事となつて、京都、奈良、大阪、神戸の春を楽しんだ。4月9日京都・嵐山の桜の満開の下に全員集合、宇治平等院、奈良春日山、大阪城、神戸六甲山、異人館街など4日間の日程でたっぷり関西情緒を満喫した。札幌・釧路からの仲間も参加し、50年ぶりの修学旅行の再現だった。

昨春は大内章司君を中心に浜松在住の今野松男君、鶴見美知子さん、真鍋富士子さんが幹事役を引きうけ、熱海・箱根めぐりの旅を楽しんだ。（5月18日〜20日）熱海から船で30分の初島を周遊、翌日は十国峠からの富士山

に歓声をあげ、芦ノ湖では船で一週、仙石原に開館したポーラ美術館（2002年オープン）で19世紀フランス印象派やエコール・ド・パリ時代の名作と日本の洋画、日本画、陶磁器、ガラス工芸などをたんのうした。札幌・釧路からも前年同様、数人が参加した。

50周年記念同期会

湖陵5期会としては平成13年10月5日、卒業50周年記念同期会を行った。この日会場の釧路プリンスホテルには地元はもとより全国から総勢107人が集った。「恐らく今回が全員大会としては最後の同期会となるでしょう。ぜひ参加を」という呼びかけに応じたのか予想を上回る盛会であった。地元の幹事たちは6月ころから準備に取り組んだが、その汗が報いられた。卒業後50周年は実は1年前倒したが「1年といえないから集まろう」という提案がどこからかあつて実現したものだ。東京の湖陵互輝会は代表幹事の舟崎明雄君を中心に阪本悟哉、松原靖行君らが動き、札幌も鬼頭勇三君、相澤珠子さんらがまとめ役となつた。翌日は阿寒一周と有志のゴルフ大会。阿寒バス社長だった今泉武君の協力によるバスツアーだった。

湖陵5期会の仲間たちも、すでに古稀をすぎし、大半は第一線をリタイアしている。しかしそれぞれに元気に、それぞれにたくましく、会えば半世紀の時間を超えて湖陵時代の表情をとりもどす。それはフシギな血脈である。

（文責 横澤 一夫）

支部だより

三支部の総会日程決まる

◇東京支部総会

日時：6月18日（土）午後2時半から

場所：日本青年館

連絡先：板本登会長

（同館内・03-3475-2556）

◇札幌湖陵会総会

日時：7月2日（土）午後5時から

場所：すすきのエンペラー

連絡先：西塚壮市事務局長

（011-272-5421）

◇十勝支部総会（予定）

日時：3月27日（日）午後0時半から

場所：帯広ワシントンホテル

連絡先：佐藤文俊会長

（十勝農業協同組合連合会内・0155-24-4090）

湖陵高同窓会を親会として

共に歩んで半世紀の 釧路教職員湖陵会

昭和24年夏、釧中卒で教職員となつている百余名で集会の機運があがり同30年春、会を設立。爾來運営費の一部を母校の後援に寄附し続けている。11月27日（土）に市内アクアホールで50年を祝つて記念式典と祝賀会を開催。

構成は管内小中高と教育大学に勤める釧中・湖陵高校出身、又趣旨に賛同する教職員が、親睦と母校の後援と修養を図るを趣旨として、集った。式典は会長藤原富美彦（桜が丘小校長）が「湖陵出身

の教員が減り、会員も最盛期の1/3になつてしまつたが、母校が富士見町から緑ヶ岡に移つても、続く限り会として継続していきたい」と力強く述べ、次に招かれた野村秀明高校長は「生徒の資質をさらに磨きをかけ、社会の求めている人材を送り出す本校の役割に努めていきたい」と。更に島本幸一同窓会幹事長は「母校の後援を永い間いただいて深く感謝し、広報くまざさの復刊をいただき厚くお礼を」と謝辞を述べた。次いで幹事長を8期つとめた加部忠夫先生始め数名へ、今日の発展に努力した方々に感謝状を贈つて会を閉め祝宴にうつつた。

（上岡 信明）



野村校長と歓談する島本同窓会幹事長

活躍の11期生ら

だれが一番にぎやか、といって東京支部の副会長小野妙子さん（湖陵11期）ほど華麗な女性はいない。
東京総会の16年6月



19日も札幌湖陵会の7月3日でも彼女の投げキスですべては奪われた。前号の6頁の東京支部と札幌湖陵会の両写真に映っているように紅一点？派手なひとである。

今釧路総会に出席の花田孝磨札幌湖陵会会長が札幌の総会で各期に呼び掛けて三百人以上を集めたうちでも最大は湖陵11期生。「釧路の8月総会へも行くわよ」

幸い？ 親会にこなかったので早速11期生のテーブルへ。
「こなくて良かった」

滝山政徳、砂山栄三さんも居たけれど女性軍に声をかける。

「だって小野妙子さんに親会が喰われてしまうもの」

大人しい？ 砂山由紀子夫人らも同感。釧中・湖陵生らは大人しい。一人の力はたかがしれている、そう思っている。だが、一人の力が燎原の火のように及ばず影響力もすごい。

中村幸雄さんが黄綬褒章

司法書士業務に長年携わってきた中村幸雄さん（湖陵1期）が16年秋の褒賞で黄綬褒章を受章されました。

町田康雄元校長が瑞宝小綬章

湖陵高校第21代校長（昭和61年4月〜平成元年3月）町田康雄さんが16年秋の叙勲で瑞宝小綬章（教育功労）を受賞されました。

花田孝磨、鈴木豊治、葭本正美さんらの札幌会、同窓会館、90周年に及ぼした助力はすばらしい。でも、妙子さんの投げキスには負けた。

一人の力。一期の力。素敵だ。

これまで良かった。でもこれからの当番期に、危惧を抱いているのは会長ばかりではない。故に創立百周年に向けて早目早目に蓄積を急いでいるのである。

お一人でもどうぞ

47年続いている同窓会総会に、欠かさず出席する人々は各期によって異なる。1人を中心にもテーブルにかたまるのである。

毎回回し合ってロビーで待ち合わせるのは釧中15期生ら。小川喜一、佐久間令次、田中正巳、渡邊忠さんとおなじみである。いつまでも続いて欲しい。

たった1人で出席した人には、知人が声をかける。隣席の仲間に紹介すれば、たちどころに話しが弾む。先輩後輩の親しみは、年齢を超えて、わだかまりなく話し合える。同じ地域に居ても、グループが違えば滅多に会えないのだから。お互いの長所も弱点も語り、助言を得られる唯一の場所であるかもしれない。（奥田 達也）

編集後記

この半年の話題は、アテネ五輪で日本選手の大活躍、新潟中越地震や年末26日にインド洋の巨大津波で犠牲者20万人などで、その映像に釘付けになった。さて白骨温泉の偽装を契機に全国の温泉について不信が広がりが法律の不備や温泉表示に関心が集まった。わが故郷自慢の川湯温泉は、いち早くこの問題に取り組み第三者検査の情報を開示して信頼を高め全国的に注目を集めた。温泉に限らず地域間ブランド競争が盛んであるが偽物も横行し安くて美味なアブラガニを高級品タラバガニと称したりニセシヤモをキャベリンと表示するのに抵抗する勢力がいる。学校で「羊頭を掲げて狗肉を売る」



(写真、右手前より時計回りで) 上岡信明・星 匠・奥田達也 田巻恒利・渋谷倫之・増子正樹

と習ったが昔の事でなく現代社会病と知って愕然の思い。

さて、この「くまざさ編集委員会」で編集委員長が目出度く交替しました。奥田編集長より29期若い星編集長の誕生です。その手腕を大いに期待できますのでOB諸兄OG諸姉からの投稿（文・写真）を歓迎します。なお原稿に削除筆する場合もあります。投稿者は卒業年・勤務先・連絡先を明記願います。宛て先は別記「くまざさ編集委員会」まで。
（田巻恒利）

釧路湖陵高校

〒085-0814
釧路市線ヶ岡三丁目一番
TEL (0154) 431-3231

くまざさ編集委員会

- 同窓会会長 栗林延次(湖陵十七期)
- 同窓会幹事長 島本幸一(湖陵十九期)
- 同窓会会計長 佐藤文昭(湖陵二二期)
- 編集委員長 星 匠(湖陵三十期)
- 編集委員 渋谷倫之(湖陵二六期)
- 編集委員 増子正樹(湖陵二十期)
- 編集顧問 上岡信明(釧中三十期)
- 編集顧問 奥田達也(湖陵一期)
- 編集事務局長 田巻恒利(湖陵十八期)

くまざさ編集委員会

〒085-0814
釧路市末広町二丁目四番地 栄屋旅館内
TEL 0154 (23) 0241
手動代替FAX 0154 (23) 0242